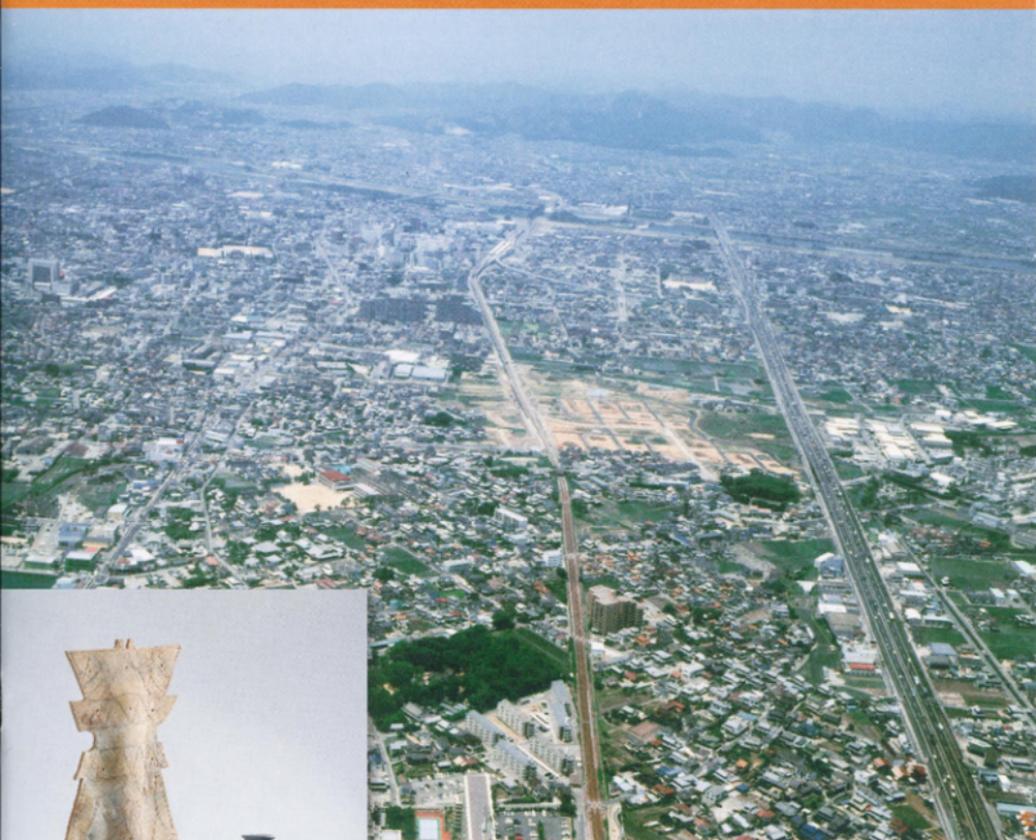


坂元遺跡Ⅱ

2009.3



兵庫県立考古博物館

はじめに

坂元遺跡は兵庫県加古川市野口町坂元・野口に所在する遺跡で、加古川野口坂元区画整理事業に伴って発掘調査を行いました。事業計画までは周知されていなかった遺跡で、多くの成果を挙げることが出来ました。

2002（平成12）年に確認調査を実施し、遺跡の広がりが確認され、遺跡範囲内の区画道路や掘削を伴う部分について2003（平成13）年度から3ヵ年かけて57区計33,011㎡の本発掘調査を行いました。その結果、縄文時代晩期から中世にかけての複合遺跡であることが確認されました。引き続き2006（平成16）年度から3ヵ年を費やして遺物整理作業を行って報告書刊行まで至りました。

その成果は多岐にわたるが、兵庫県では初めての地輪窓跡の調査や律令期の駅子の村の確認など兵庫県の考古学史に残る遺跡です。調査報告は膨大なものになり、調査年次ごとに報告しましたが、ここでは主に時代順に坂元遺跡の紹介をします。

調査は便宜的に調査順に調査区名を与え、調査地区ごとに遺構番号を決めました。そのことから、4桁の遺構番号とし、前2桁が調査地区を後2桁が地区ごとの遺構番号を示しています。（例えば、28区の溝14ならSD2814と表記しました。）また、遺構番号の前の2文字のアルファベットは遺構の種類を表しています。SAは柵、SBは掘立柱建物、SDは溝、SEは井戸、SFは道・大畦畔、SHは堅穴住居、SKは土坑、SPは柱穴、SRは水路、STは木棺墓、SXは落ち込みなど（方形周溝墓も本報告では使用）のことで、

第1表 坂元遺跡調査経過一覧

調査年度（調査番号）	担当者	調査区	調査面積	調査期間
平成13年度（2003162）	平田・久保・織	1～4区	7,626㎡	15.10.23～16.3.8
平成14年度（2004001）	岡田・渡辺・西口・山上・織	5～41区	18,578㎡	16.7.7～17.3.14
平成15年度（2005001）	渡辺・山上・長濱	42～57区	6,807㎡	17.5.26～10.17



坂元遺跡空中写真（南から）

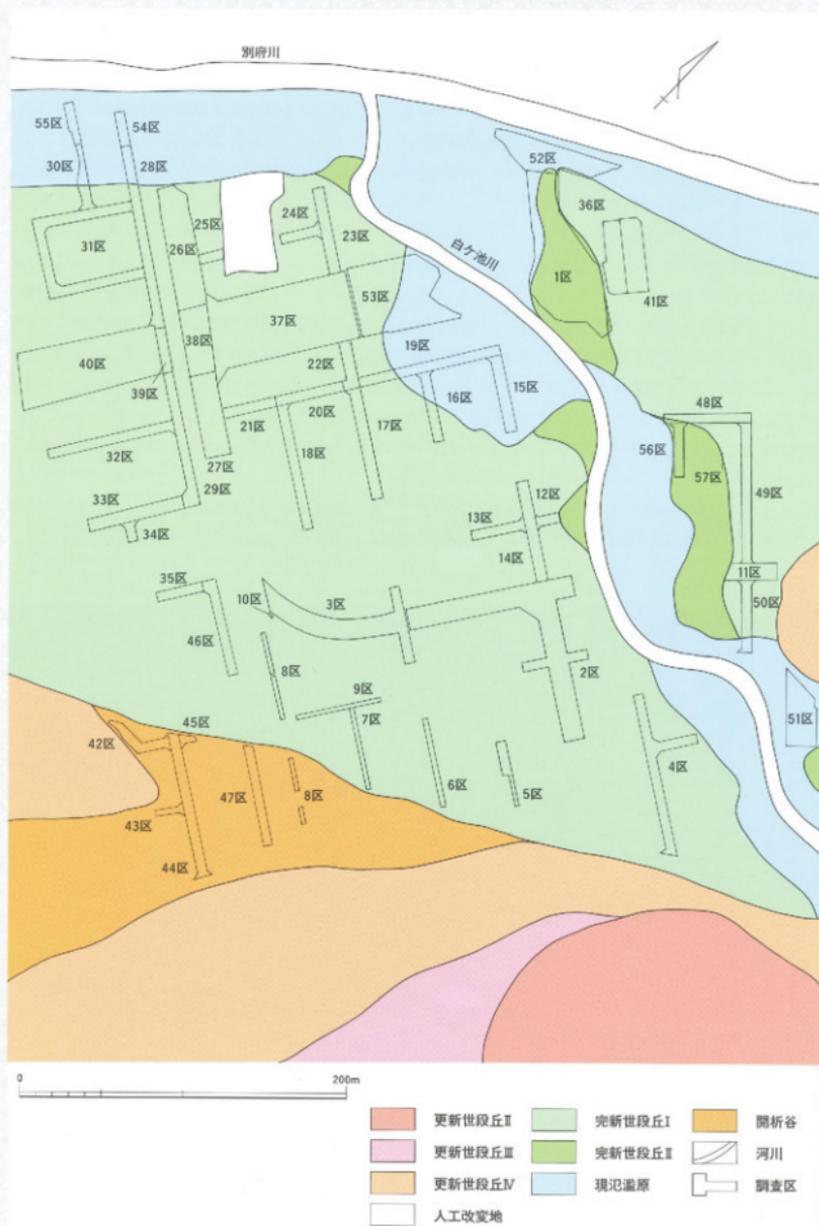
遺跡の位置

地理学の青木哲哉氏に随時調査に参加していただき、地形分類など地理学的な見地から多くの教示を得ました。その成果をもとに坂元遺跡の位置や地形を紹介します。

坂元遺跡は加古川ならびにその支流の氾濫源を中心として広がった集落です。現在の加古川から約2 km東に離れています。遺跡内には白ヶ池川・別府川の2本の河川が存在しますが、遺跡が営まれた時代によって河道の位置は変化していたものと思われます。白ヶ池川の現河道は洪水を避けるために昭和40年代に南側に迂回されたものです。それが今回の事業でショートカットされ、昭和の河道に戻りつつあります。別府川も河川改修によって大規模な河川になっていますが、上流域では河道も判然としない暴れ川です。坂元遺跡は土地改良（圃場整備）事業が行われず、幸いにも旧地形がそのまま残っていました。そのことから、より旧地形を復原するのに恵まれていました。坂元遺跡は段丘面と低地、そして旧河道に分類されます。完新世段丘Ⅰは今回調査した大半の地区が該当します。白ヶ池川下流部で発達しており、加古川下流沖積地の南東部に細長く分布しています。放射性炭素年代測定値では約1万年前に堆積した数値が得られています。完新世段丘Ⅱとの間には2 m前後の段丘崖が存在します。1区と56区がこの段丘面に位置します。57区の埴輪窯跡の可能性の高い遺構(SX5701)は段丘崖を利用しています。低地は現氾濫原と開折谷に分けられます。現氾濫原は別府川沿いの段丘Ⅰの大きな崖下に広がっています。白ヶ池川沿いの15・16・19区にも小面積ながら低地が広がっています。水田に利用され、律令期には祭祀も行われていました。開折谷は更新世段丘を削っているもので、42～44区が谷出口付近に位置しています。段丘面には5本の旧河道があり、白ヶ池川の旧河道で、調査区西側の旧河道は比較的規模の大きなもので加古川の本流か支流かと思われます。



坂元遺跡空中写真（東から）



遺跡付近の地形面と調査区 (青木哲哉)

歴史的環境

坂元遺跡は播磨国風土記では賀古郡駅家里、和名抄では賀古郷に位置しています。周知の遺跡として認識されていなかったものの、南側に旧西国街道が通り、坂元の集落には和泉式部の墓と伝承される南北朝期の立派な花崗岩製の宝篋印塔が存在しています。遺物の採集もされていたようです。坂元遺跡の周辺には多くの遺跡が知られています。

東側には律令期山陽道の賀古駅家に推定されている古大内遺跡があります。礎石は確認されているものの発掘調査は行われておらず、わからないことが多い遺跡です。賀古駅家は日本最大の駅家で、40匹の馬がおかれていました。その北側の現在の野口神社の地には野口庵寺があり、その間に教信寺があり県指定の五輪塔や石棺仏があります。



坂元伝和泉式部宝篋印塔



古大内遺跡（大蔵神社）

南側には西国街道が通り、その南には古代山陽道があります。細田構居跡や北在家遺跡など知られていますが、まだまだ未確認の遺跡が広がっているものと思われます。式内社の泊神社が鎮座し、その周辺に港があったものと予想されます。

西側には弥生時代から中世にかけての複合遺跡である溝之口遺跡が約500m離れて存在します。弥生時代中期から律令期にかけて坂元遺跡と密接な関係にある遺跡です。弥生時代は溝之口遺跡が母集落でそこから分かれたムラが坂元遺跡ではないかと思われます。奈良時代の遺構は賀古郡衙に推定されている遺跡です。坂元遺跡と溝之口遺跡は、郡衙と賀古駅を維持するための村（駅子）の関係になります。



教信寺五輪塔



野口神社（野口庵寺）

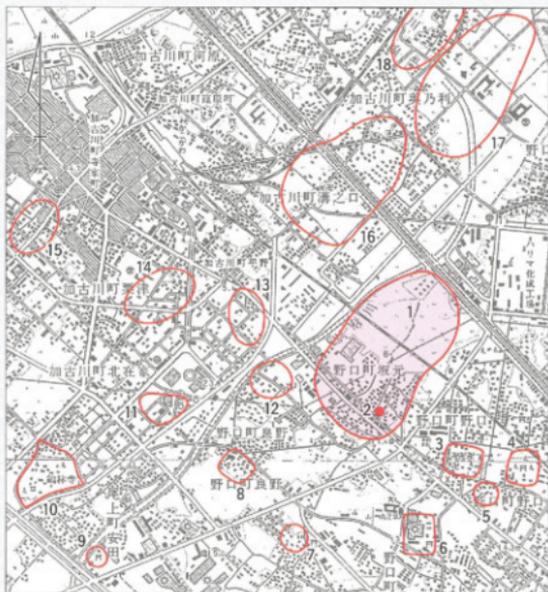
溝之口遺跡の北側には美乃利遺跡が広がっています。弥生時代前期からの集落跡で水田の状況がよくわかる遺跡です。坂元遺跡の西側を流れる別府川の上流にあります。さらに上流部に弥生時代から中世にかけての複合遺跡である大野遺跡があり、さらに北側の丘陵上に日岡古墳群が築造されています。東側丘陵には行者塚古墳・尼塚古墳などの西条古墳群が築造され、奈良時代の西条廃寺が営まれています。



西条廃寺



溝之口遺跡



1. 坂元遺跡
2. 伝和泉式部宝篋印塔
3. 教信寺
4. 野口廃寺
5. 野口城跡
6. 古大内遺跡 (賀古駅家)
7. 長砂構居跡
8. 細田構居跡
9. 安田構居跡
10. 鶴林寺
11. 北在家遺跡
12. 具平塚遺跡
13. 平野遺跡
14. 栗津遺跡
15. 栗津大年遺跡
16. 溝之口遺跡
17. 美乃利遺跡
18. 大野遺跡

S=1/50,000

坂元遺跡の位置と周辺の遺跡

地形分類		段丘 1			
時代	地区	遺構名	主な遺物		
縄文時代	2区		縄文土器		
	11区	SK1102	縄文土器		
	56区	SI5601~5604	縄文土器		
弥生時代	前期	1区	SX0101~09	弥生土器・石鏃	
			SK0101~07	弥生土器	
			SD0101	弥生土器	
			SX1201~02	弥生土器	
		12区	SD1602	弥生土器	
		19区	SX1902	弥生土器	
		17区	SK1701	弥生土器	
		23区	SD2301	弥生土器	
		25区	SB2502	弥生土器	
		26区	SX2664	弥生土器	
		28区	SH2801	弥生土器	
		28区	SK2801	弥生土器	
	中期	31区	SK3103・06	弥生土器	
		31区	SK3115・16	弥生土器	
		31区	SK3122	弥生土器	
		31区	SH3106	弥生土器	
		37区	SK3730	弥生土器	
		38区	SK3809	弥生土器	
		38区	SD3804	弥生土器	
		53区	SX5301	弥生土器	
		53区	SX5302・03	弥生土器	
		53区	SX5304	弥生土器	
		31区	SH31	弥生土器	
		後期	48区	SD4806	弥生土器
	53区		SH5301	弥生土器	
	古墳時代	前期			
		中期	16区	SD1601	土師器
		後期	12区	SD1207	須恵器
			16区	SX1603	須恵器・埴輪
			17区	SX1704	須恵器
			19区	SK1905	須恵器
			23区	SX2302	須恵器・埴輪
			26区	SK2601	須恵器
28区			SP2895	須恵器・土師器	
31区			SK3117	須恵器・土師器	
31区			SH3101~05	須恵器	
40区			SH4001	土師器・土鏃	
53区			SK5301	須恵器	
53区			SX5301(上)	須恵器	
53区		埴輪窯跡	埴輪		
56区		SH5602	土師器		
57区		SK5701	埴輪		
57区		SX5701	埴輪		
飛鳥時代		28区	SD2805	須恵器	
		28区	SR2803	須恵器・土師器	
	37区	SH3701~03	土師器・須恵器		

地形分類		段丘 1		
時代	地区	遺構名	主な遺物	
奈良時代	前半	26区	SB26	須恵器
		28区	SB28	須恵器
		31区	SB31	須恵器
		31区	SX3102	須恵器・土師器
		37区	SB37	須恵器
		38区	SD3801	須恵器・土師器
		40区	水田	
		11区	SB1101	須恵器
		11区	SX1101	須恵器
		17区	SR1701	須恵器・土師器・瓦
	後半	18区	SD1801	須恵器
		19区	SR1901	須恵器・土師器・瓦
		22区	SD2204	須恵器・土師器・瓦
		26区	SB2608・15他	須恵器
		28区	SB28	須恵器
		31区	SB31	須恵器
		31区	土橋	須恵器
		31区	SR3102	土師器
		37区	SB37	須恵器
		37区	SE3701	須恵器・土師器・瓦
平安時代	鎌倉時代	38区	SK3815	須恵器・紡錘車
		40区	SK4020	須恵器
	40区	水田	須恵器	
	40区	SD4015	須恵器・土師器	
	2区	SK0204		
	2区	SB0201~03		
	2区	SK0208		
	2区	SD0208		
5区	SD0501・02			

地形分類		低地		
時代	地区	遺構名	主な遺物	
奈良時代	前半	15区	水田	須恵器
		19区	水田	
		53区	水田	
		30区	SR3001	
		30区	水田	
	後半	15区	水田	
		19区	水田	
		30区	水田	
		53区	水田	
		54区	水田	
55区	水田・大アゼ			

居住域
 墓域
 生産域

第2図 坂元遺跡の位置と周辺地形分類 (青木哲哉氏作成)

縄文時代の遺構

晩期の遺構が1区・11区・56区で確認されています。1区・11区では土坑が、56区では埋甕が調査されています。すべて晩期に限られています。出土土器も晩期に限られており、3地区以外に28区・37区・40区でも土器小片が出土しています。石器も確認されています。

2区・11区の土坑は性格が明らかではありません。2区のSK0221で最大径140cm、深さ88cmを測ります。

56区の埋甕は並んで検出されており、土器が完形であることから墓と思われます。調査区内では4基調査しましたが、それ以上周辺に広がっていると思われます。56区の埋甕の例から白ヶ池川沿いの備考地に墓が広がっていたものと思われます。



56区埋甕



56区埋甕縄文土器（集合写真）

弥生時代の遺構

前期の土器は数地点から出土しているが、遺構は確認されていません。検出されている遺構の時期は中期後半からです。比較的広い範囲で遺構が確認されています。住居跡・土坑・方形周溝墓・水田跡と居住域・墓域・生産域のすべてを確認しています。地形分類からすると、水田は低地に、方形周溝墓は段丘1に、竪穴住居跡は段丘1と段丘2に築かれていることが明らかになりました。

中期後半の遺構

竪穴住居跡は、26区・28区・30区・31区・37区・40区・56区で計22棟確認されています。住居跡は段丘1と段丘2に位置しています。そのうち弥生時代中期後半の住居跡は4棟で全容がわかるのはSH3106です。径9.0mの円形住居跡で壁溝が巡っています。壁は25cm 残存していました。主柱穴は4本柱で中央土坑が存在します。後期の竪穴住居跡は2棟調査しています。SH3104とSH5601で、SH5601は比較的多くの遺物が出上っています。後期後半の1辺5～2mの方形プランです。

掘立柱建物も25区で1棟(SB2501)調査されています。1×2間の建物です。柱穴の径は小さいものの深さがあることが特徴です。土坑は26区・28区・31区・37区などで20基以上調査されています。

土坑にはたくさんの土器が入れられていたSD3804のような土坑と住居周辺にある土器棺墓の可能性のあるSK3103などの土坑の2種があります。

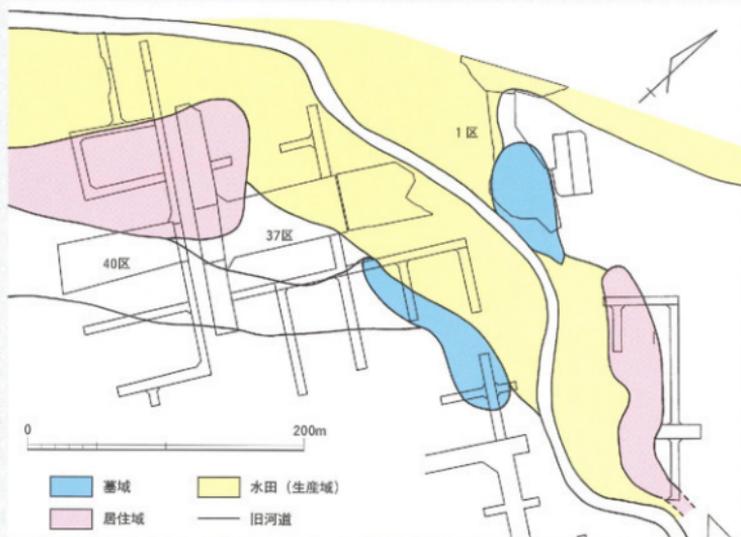


31区竪穴住居跡 (SH3106)

方形周溝墓は段丘1と低地に存在し、白ヶ池川周辺に15基認められます。1区では9基、主体部は11基検出されており、低地であることから削平を受けておらず、主体部も残存していました。SX0101では石剣が、SX0101とSX0103では石鏃を副葬していました。1区以外の方形周溝墓は段丘1に位置しており、埋葬以後の土地改変によって、主体部は削平されていました。ただ、遺構深度のある周溝部分に供献土器が残されていました。



1区方形周溝墓群



弥生時代の坂元遺跡 (居住域・墓域・生産域分布図)



1区石剣・石鏃出土状態

SX0105 土器出土状況



SX0103 土器出土状況



12区方形周溝墓



16区・19区弥生土器出土状態

12区土器出土状態

供獻土器の多くは孔が開けられていました。埋葬に際する弥生人の意識が現わされているものと思われ
ます。器種は壺を中心としています。それ以外に甕・鉢・高杯が出土しています。



12区方形周溝墓出土土器

19区など低地では水田が確認されています。遺構として明確に弥生時代まで遡る水田は検出していませんが、十分に存在した可能性が高いものと思われます。その証拠として流路の掘削が考えられます。坂元遺跡を4本の流路が通っていますが、そのうちの2本は底から弥生時代中期後半の遺物が出土しており、人工的に掘られた大溝がそのまま河道になったものと思っています。意図的に流路を掘削するのは水田への水の供給のためと考えるのが妥当だと思います。それによって、周辺の低地は生産域として水田として利用されていたのではないのでしょうか。



弥生中期土器出土状態 (左SD3804・右SK3116)



31区流路 (SR3101・北から)

後期の遺構

竪穴住居跡と水田跡を調査しました。竪穴住居跡は3棟検出しています。墓は確認されていません。集落跡は中期に比べて縮小したものと思われます。段丘1の31区で1棟、同じく段丘2の46区で1棟検出しています。3棟ともすべて方形のプランです。水田跡は低地に継続して広がっていたと思います。



56区竪穴住居跡

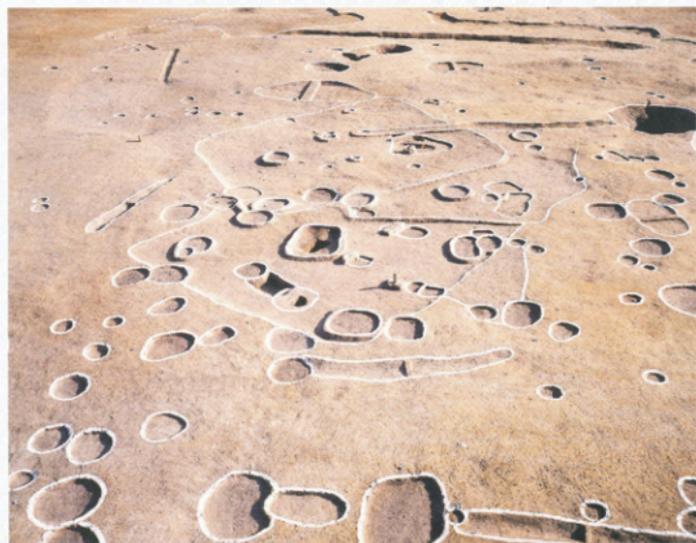


後期の土器 (SH5601出土遺物)

古墳時代の遺構

前期・中期の明確な遺構は検出されていません。遺構が確認されているのは後期（6世紀）になってからです。竪穴住居跡・埴輪窯跡・土坑・古墳・水田跡などを調査しました。

竪穴住居跡は、段丘2で確認されており、弥生時代と変化ありません。31区で4棟、37区で3棟、40区で2棟、56区で2棟の11棟を確認しています。すべて平面プランは方形で、残存状態は良好とはいえません。1辺4～5mと一般的な大きさの住居跡です。



37区竪穴住居跡



31区竪穴住居跡

祭祀土坑

旧河道2に接して祭祀土坑が2基確認されています。旧河道に向かって築かれており、火を使用するとともに、多くの土器を埋納していました。2基(SK1905・SX1704)並立して存在するのは、その部分が祭祀が執行されていた地区であることをしめすのでしょうか。集落の北側に位置しており、対岸に古墳が築かれている部分の南端で集落に向かって構築されています。



祭祀土坑 (左SK1905・右SX1704)



左SK1905・右SX1704



出土遺物

古墳

古墳は段丘1に築かれ、白ヶ池川の縁辺に存在します。立地は弥生中期の方周溝墓と同じです。墳丘は削平されており、明らかな埋葬施設は確認できませんでした。古墳は埴輪を有する6世紀前半から半ばのものと6世紀末の埴輪を持たない古墳に分けられます。

SX1601とSX5302の2基と23区で検出されたSX2302とSX5301が古墳の可能性の高い遺構です。SX1601は1時期古い古墳です。形象埴輪が多く出土しています。円筒埴輪と人物・家・鳥があり、須恵器甕・器台も出土しています。他地区の埴輪とは多少異なっています。胎土が精緻で色調がやや淡くなっています。形象埴輪は小片となっていることから、全体像は不明ですが武人埴輪と思われます。甲冑を装着した埴輪で肩庇付き冑を被ったもので右目部分が残っています。他の形象埴輪も全体を想定できるものではありません。



SX1601 埴輪出土状態



SX1601出土埴輪



淡輪型埴輪 (SX5701)

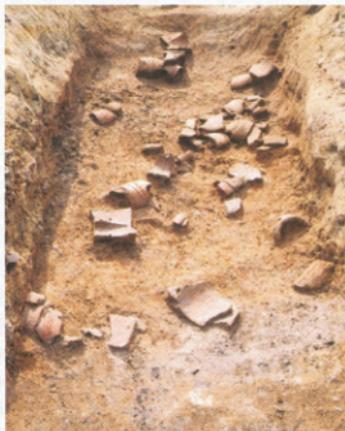
SX2302は浅い落ち込みで埴輪小片が多く出土しています。石見型盾も出土しており、近接地点からも石見型盾や装飾須恵器が出土していることから、古墳が存在した可能性が高いと思われます。明確な遺構は検出していません。



SX2302周辺出土石見型盾・装飾須恵器

石見型盾

SX5302はSX5301の北東、埴輪窯跡の南側に位置しており、やはり古墳周溝だけが残っています。石見型盾を多く出土していることが特徴です。この埴輪は北側に位置する埴輪窯跡(SX5305)出土の埴輪です。棺痕跡かと思われるものを調査していますので、木棺と思われます。



埴輪窯跡 (SX5305) 埴輪出土状態

埴輪窯跡

SX5301は埴輪窯跡の南側にあり、弥生時代中期の方形周溝墓と近い位置に築かれています。周溝しか残っていません。須恵器甕の破片が溝底に広がっていました。今回調査したなかでは一番古墳の形状を残していますが、埋葬施設は確認していません。埴輪を保有していない古墳で、6世紀後半と新しくなります。

埴輪窯は2基調査しました。段丘斜面を利用して築かれたSX5305では主に人物・家・盾などの形象埴輪を焼いていました。もう1基は小規模なもので、主に円筒埴輪を焼いていました。



埴輪窯跡 (SX5305) 全景



53区埴輪窯跡 (SX5305) 古墳 (SX5301) 全景



古墳時代出土遺物



奈良時代の遺構

坂元遺跡の中心となる時代で、ほぼ全域で奈良時代の遺構が確認されています。特に26・28・31・37～40区が中心地で遺構が密集して検出されています。

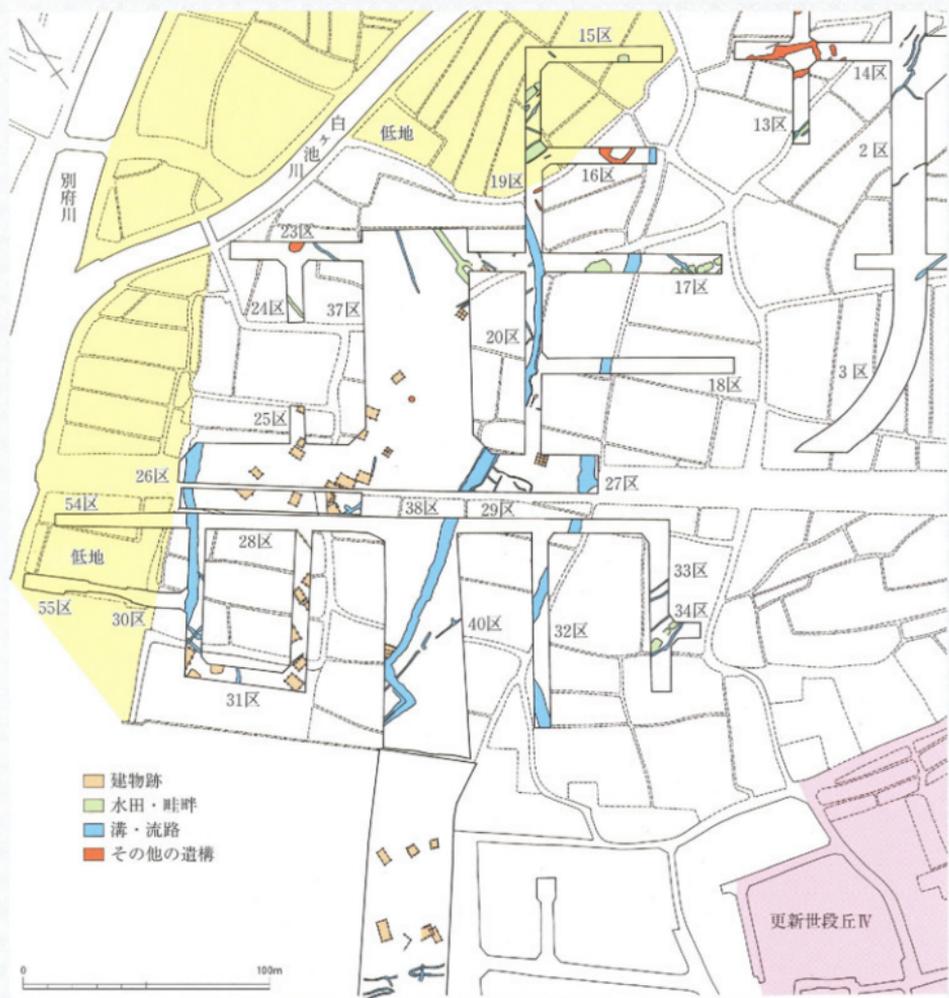
調査した遺構は掘立柱建物78棟（弥生・中世を除く）をはじめ土坑・溝・溝・井戸・水田などです。掘立柱建物を100棟近く調査したことが最大の成果でしょう。本発掘調査が面的ではなく、区画街路を中心とした調査であることを考慮すれば、全体を調査すれば倍以上の掘立柱建物が確認されることは確実でしょう。さらに、掘立柱建物の主軸方向が変化していることが明らかになりました。これは律令期山陽道建設に伴うものと思われ、奈良時代の後期に地割を大きく変えた結果と考えています。

中心地域では駅子の館を囲む溝も確認され、賀古駅家の駅子館と推定される遺構になりました。掘立柱建物は律令期の官衙遺跡に多い2×3間（一部2×4間・2×5間）の側柱建物が中心ですが、官衙遺構のように整然とは並んでいませんでした。

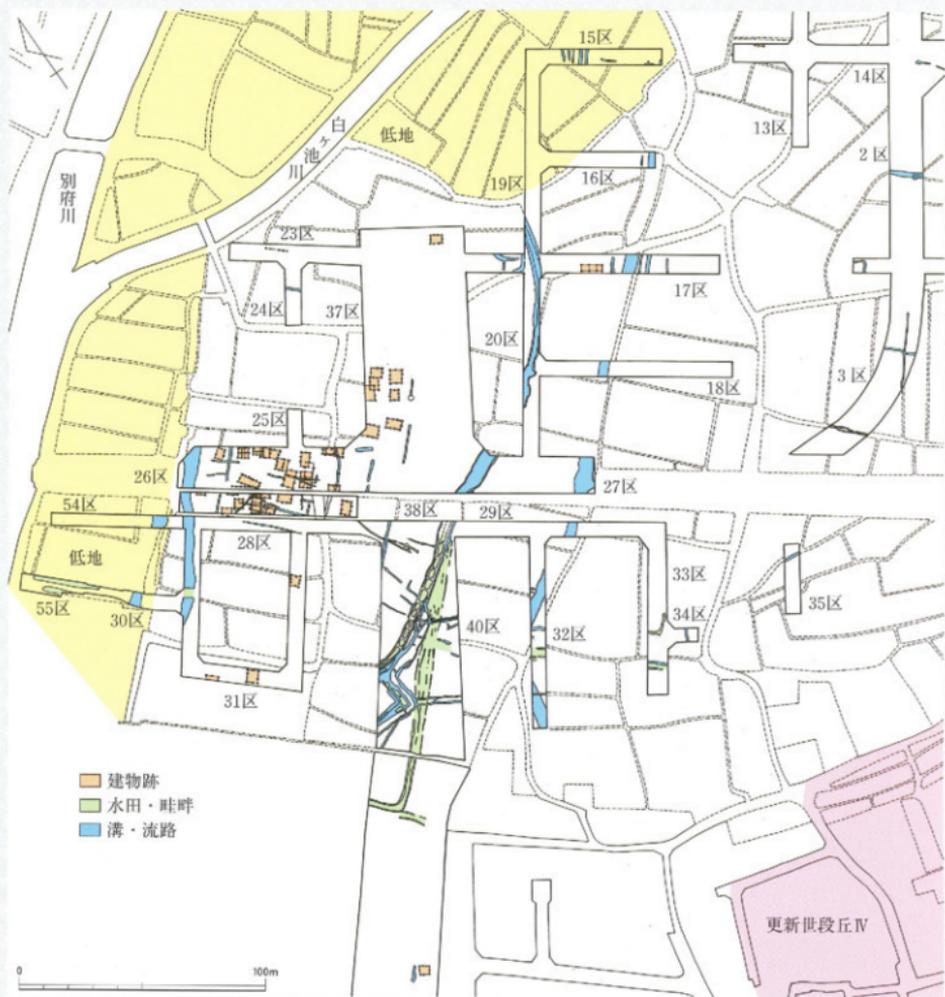
全体的には一般集落の様相を示す出土遺物ですが、その中には官衙的遺物も混じっています。木簡・墨書土器をはじめ播磨国府系瓦を含む瓦類・緑釉・灰釉・律令期木製祭祀具（人形・斎串）・土馬・硯などです。大量ではないものの少なからず保有しているのが、坂元遺跡の特徴です。



2つの主軸方向を持つ掘立柱建物（31区・SB3101と3102）



奈良時代前半の坂元遺跡



奈良時代後半の坂元遺跡

掘立柱建物

側柱建物 ほとんどの建物がこの種類です。



SB2603・05



SB3703

総柱建物 数棟だけこの種類です。一般的には倉庫などが想定されています。坂元遺跡では時期は限定されず、古墳時代 (SB3601)、奈良時代 (SB2602・SB2701)、平安時代 (SB4901) にあります。確認された地区も限られていません。



SB2602



SB2701



SB3601



SB4901

溝

坂元遺跡では多くの溝が確認されています。低湿地ゆえに古代人は努力したのでしょうか。奈良時代後半の遺構では、26・28・37区にかけて方形に巡る溝が確認されました。集落の中心部を画する溝と考えています。



駅戸集落の中心部を画する溝 (SD2805)



各地区の溝

井戸



SE3701断ち割り断面

37区で1基だけ確認されました。坂元遺跡では唯一の井戸です。素掘りの井戸で菰を施設に利用していたようです。



坂元遺跡唯一調査された井戸 (SE3701)



SE3701菰



SE3701出土土器

水田

2 時期以上の水田を確認しました。

17・22区水田



40区水田



遺物出土状態



55区大アゼ



55区大アゼ 出土遺物

水路



水路 1 (左26区、右31区)

水路 2 (27区)



水路 3 (32区)



水路 1 遺物出土状態

土橋

地割を変更したと考
えた根拠の1つとして
旧河道1に架けられた
土橋があります。門を
伴う遺構で55区の大ア
ゼに続いています。



土橋



土橋



土橋門 礎石



旧河道1 出土炊飯具

出土遺物

須恵器・土師器を中心に多くの遺物が出土しています。



弥生土器



須恵器



土師器



武人埴輪



瓦



和同開珎



木簡



イダコ壺・土鍾

一般公開（現地説明会など）

調査段階で3回現地説明会を開催し、皆様にじかに遺跡を歩いていただき、遺物を見ていただきました。説明会資料以外にも「ひょうごの遺跡」で随時報告しました。第1回の現地説明会は2004年10月11日（月・祝日）に第2回は2005年1月22日（土）に、第3回は2005年9月10日（土）に実施しました。



現地説明会の様子



調査風景



整理作業風景



兵庫県文化財調査報告第366冊

坂元遺跡Ⅱ(要約版)

2009(平成21)年3月23日発行

【編集／発行】兵庫県立考古博物館

【印刷】 岡山印刷株式会社